

日本農業新聞 昭和26年2月26日付

「菌耕農法」が成果

長野で
研究会
地力高め病害抑制

「菌が耕す」土づくりを追求する「菌耕農法」が、稲作や園芸作物、畜産などで成果を挙げてい

性菌の枯草菌、嫌気性菌など10種類の菌の胞子が含まれている。アスカがこのほど長野県内で開いた研究会では、同農法を

発生が少なく、根張りが良くなり倒伏しにくくなるため、「収量と品質が向上した」と報告。同社

解促進とガス発生抑制で効果を確かめている。畑作や施設園芸、果樹では共通して「団粒化が進んで土壌が軟らかくなり、保水性や排水性、通気性が改善した」との声があった。

畜産では、敷料のおがくずやもみ殻に菌製剤を散布すると2週間ほどで発酵が始まり、臭いが薄くなる。「悪臭のストレスから解放され、肥育牛の肉質が向上した」との報告があった。堆肥は発酵温度が60度以下と高温にならず、「有用菌が死滅せず切り返し作業が少なくて済む」といった省力効果も報告された。ただ、同農法の効果を

持続させるには「少なくとも3年以上は連用する必要がある」との声もあった。

「菌耕農法」の問い合わせはアスカ、(電)042(5966)5951。